ノイド」色素デアル。生藥ハ紅色ヲ呈スルガ水浸液ヲ稀釋スルト純黄色ヲ呈シ重**クロム**酸加里水溶液ノ色トヨク似テ居ル。日本藥局方デハ生藥ノ 15000 倍ノ水浸液ノ色ガ重**クロム**酸加里0.05 %水溶液ヨリモ濃色ヲ呈スベキコトヲ規定シテ居ル。さふらんノ香氣ハ Picrocrocin トイフ配糖體ガ加水分解シテ芳香成分ヲ生ズルニ因ル。故ニさふらんハ新鮮品ハ香氣薄ク時日ヲ經過スルニ從ヒ香氣ヲ生ズル。アマリ古クナルト又香氣ガ失セル。我國ノ需要家方面(賣藥製造)デ「スペイン」産さふらんガ香氣ガ良ク到底日本産ハ及バヌト言ッテ居ル人モアルガ、コレハ歐洲品ガ印度洋ヲ經テ日本ニ來ルマデニ相當ノ時日ヲ經過スル爲ニ適當ニ醱酵シテ香氣ヲ生ズルノデアッテ日本産ノ市場品ハコレニ較ベルト新鮮デアル爲ニ香氣ガ薄イ様ニ考ヘラレテ居ルノデアルマイカト國産さふらんノ爲ニ一言辯ジテ置ク。

げんのしょうこ＝就テ

邦産藥用植物生産狀況調査（其四）

津村研究所　木 村 雄 四 郎

Yushiro Kimura: Ueber die japanishe Arznei-drogen, ihr Anbau, ihr Einsammlung und Zubereitung etc. (IV): Ueber *Geranium nepalense* Sweet.

げんのしょうこ *Geranium nepalense* Sweet. (*G. Thunbergii* Sieb. et Zucc.) ハ廣ク我邦各地ニ野生シ古來民間ニ於テ所謂痢病ノ妙藥ニ供サレテキルコトハ其げんのしょうこ（現ノ證據）ノ名稱ニ徵シテモ明カデアルガ、其他藥效ニ由來スル方言モ亦頗ル多ク我邦ノ民間藥トシテ如何ニ交渉多キカヲ知ルコトガ出來ヤウ。

今、東京女子藥學專門學校ノ調査ニナル鄕土ノ民間藥調査表カラげんのしょうこニ關スル方言ヲ摘記スルト次ノヤウデアル。

先ヅ其藥效ニ由來スル方言ヲ見ルニりびゃうさう（山口縣厚狹町、靜岡縣三島町）、りびゃうぐさ（沼津市、群馬縣碓氷郡秋間村）、せきりぐさ（石川縣津幡町）、しょきぐさ（山梨縣西八代郡下部村）、ぢびょうぐさ（山梨縣中巨摩郡源村）、ぢびょうさう（和歌山縣伊都郡山田村）、てきめんさう（長野縣伊那町）、たちまちさう（鳥取縣倉吉町）、いしゃいらず（福井縣大野郡下庄村、長野縣伊

郡町、札幌市)、いしゃなかせ(兵庫縣氷上郡八木村、香川縣大川郡造田村)、いしゃころし(福井縣大野郡下庄村、神奈川縣二宮町、東京府青梅町)、いしゃだをし(旭川市、德島縣阿波郡大俣村)、くちどめ(會津)等ガアリ、又草ノ形態カラうめづる(三重縣木本町、宇治山田市、神奈川縣大船町)、うめづるさう(宇治山田市)、ねこあし(埼玉縣松山町、青森縣津輕地方、神奈川縣大船町、福島縣原ノ町)、ねこあしさう(大垣市、旭川市)、てんぐさ(山梨縣南都留郡谷村)、くちびるさう(長野縣埴科郡坂城町)、みこしぐさ(兵庫縣氷上郡國領村、岡山縣淺口郡連島村、山口縣厚狹町、小樽市、宇治山田市、山口縣都濃郡福川町、北海道追分町、大分縣宇佐郡北馬城村、愛媛縣新居濱町)、ふうろさう(埼玉縣北埼玉郡利島村、岐阜縣稻葉郡日置江村)等ノ名ガアル。



Fig. 1. *Geranium nepalense* SWEET
げんのしょうこ(木村寫ス)

以上ハげんのしょうこノ方言ニ關スル一例デアルガ尚各地ニ幾多ノ方言アルベク切ニ讀者各位ノ御敎示ヲ御願ヒスル。

げんのしょうこハ民間藥トシテ葉又ハ莖葉或ハ全草ヲ用ヒ俗間デハ何レモ夏ノ土用ノ丑ノ日ニ採集シ陰干トスルヤウニ傳ヘラレテキルガ、要スルニ此時期ハげんのしょうこノ最盛期デアリ從ッテ藥効分モ多ク且ツ他ノ類似植物トノ鑑別ヲ容易ナラシメルノデ最モ採集ノ適期デアラウ。げんのしょうこハ所謂痢病ニ止瀉藥トシテ煎服スル他、反對ニ便祕症ニ用ヒ(福岡縣三池郡銀水町)又茶ノ代用ニ供シ(石川縣津幡町、福島縣白河町、山形縣東置賜郡小松町)或ハ腫物、しもやけ等ノ洗滌料(長野縣坂城町、旭川市)所謂冷エ症、

リウマチス等＝浴用（長野縣埴科郡東條村、山梨縣巨摩郡百田村）サレテヰルガ殊＝近年＝至リ其藥理的作用モ闡明セラレ醫藥トシテ製藥原料＝供サレル量モ著シク增加ノ傾向ヲ示シテヰル。

昭和七年內務省衞生局ノ統計＝依レバ全國生產數量ハ 15.697 貫、其價額 6.077 圓＝達シテヰルガ而モ實際需要量ノ一斑ヲ示スニ過ギヌデアラウ。從ッテ其生產ハ從來專ラ野生品＝俟ッタガ近年東京府下デハ其栽培ヲ試ミ品質並＝經濟上相當ナ成績ヲ納メテヰル。

栽　培　法

げんのしょうこノ栽培＝就テハ昨年來津村藥用植物園＝於テモ栽培試驗中デアルガ、今東京府下＝於ケル一二農家＝就テ栽培上ノ經驗ヲ徵スル＝次ノ通リデアル。

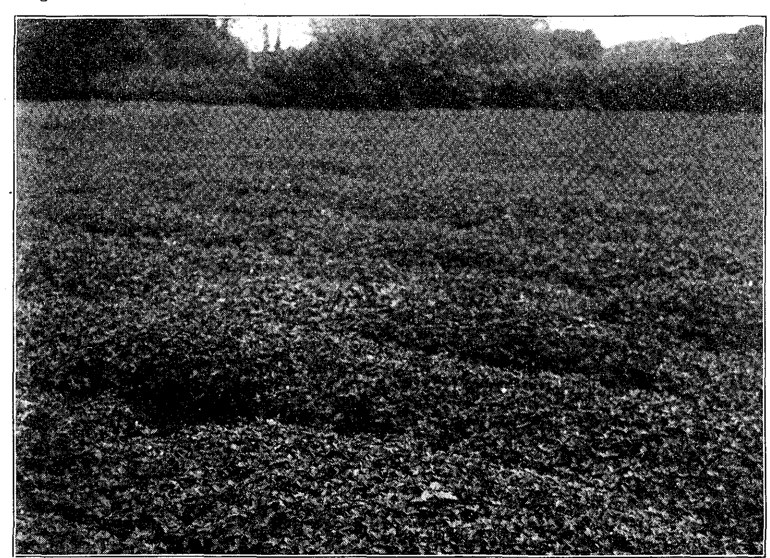


Fig. 2. Kultur von *Geranium nepalense* SWEET in Japan
東京府下＝於ケルげんのしょうこノ栽培（木村寫ス）

げんのしょうこヲ栽培スル＝ハ先ヅ三月中旬豫メ整地シタ苗床＝反當 5〜8 合ヲ播種スル。移植期ハ九月〜十月下旬デ豫メ整地シタ畑地＝畦幅 2 尺 5 寸、株間 7〜8 寸＝移植スル。十二月ヨリ翌年二月＝涉リ數回＝分ケ下肥 500〜800 貫（50〜80 杯、一杯約 10 貫入）ヲ施肥スル。東京近郊デハ下肥ハ 50 杯 1 圓 50 錢內外ノ安價ナルタメ寒中充分＝施肥シ以テ寒冷＝ヨル霜柱ヲ防ギ從ッテ苗ノ發育ハ頗ル良好デアル。新株ハ三月下旬ヨリ漸次繁殖シ七月中旬＝ハ第一回ヲ



Fig. 3. Die Pflauze der Ernte-Zeit
採取期ニ於ケルげんのしょうこ（木村寫ス）

刈取ル。盛夏切株カラ再ビ繁植スルカラ十月中旬ニハ第二回ヲ刈取ル。

げんのしょうこノ乾燥歩止リハ生草ニ對シ約 1/4 デ收量ハ第一回干上リ約 100〜150 貫、第二回約 50 貫デ卽チ反收 150〜200 貫デアル。第 3 年目ニ至リ株ヲ掘リ上ゲテ新苗ト更新サセル。

げんのしょうこハ時價 100 貫 50 圓内外デアルカラ一般農作物ニ比シ甚ダ有利デ從ッテ東京府下ニ於ケル作付反別ハ漸次增加ノ傾向ヲ示シ昨年度ノ 1 町 5 反歩ニ比シ本年度ハ一躍 5 町歩ニ達スル盛況ヲ呈シテヰル。



Fig. 4. Trocknen der *Geranium nepalense* SWEET
東京府下ニ於ケルげんのしょうこノ乾燥（木村寫ス）

調製法

げんのしょうこハナルベク晴天ノ日ヲ選ビ地上部ヲ刈取リ筵ニ擴ゲテ天日ニテ乾燥スル。乾燥ニハ 4〜7 日ヲ要シ其際取扱上葉ノ脫落セザルヤウ注意ヲ要スル。乾燥歩止リハ生干ノ約 1/4 デアル。乾燥後ハ納屋ニ收納シ若干濕メリヲ含ミタル後、約 4〜5 貫匁ヲ藁繩ニテ結ビ荷造リスル。

品　　質

げんのしょうこハ開花時ニ地上部ノ全草ヲ採取シ乾燥シタモノデアル。全草

ノ長サ約 30〜40 糎、全株細毛ヲ密生スル、莖ハ皺縮シ顯著ナ縱溝ガアリ結節ハ稍々隆起スル。葉ハ對生シ長柄ガアリ掌狀 3〜5 裂シ裂片ハ稍々菱形デ粗鋸齒緣ガアル、葉ノ上面ニハ屢々紫黑色ノ斑點ヲ存スル。又花及果實ヲ具ヘル。花ハ長梗ガアリ白色又ハ淡紫紅色ノ五瓣花デ直徑 10 糎内外、朔果ハ長嘴ガアリ長サ 1〜2 糎内外デ屢々朔裂シテヰル。

げんのしょうこハ鮮綠色ヲ呈シ葉ノ多イモノヲ良品トスル。根ヲ有スルモノハ槪ネ泥ヲ含ミ、乾燥不充分ナルモノハ莖葉共ニ褐變スル。坊間殆ンド葉ヲ脫落シ、又屢々他ノ雜草ヲ夾雜スルモノガアルガ何レモ甚ダ宜シカラズ。

今、げんのしょうこニ就キ一般成分及**タンニン**質ヲ定量スルニ次ノ結果ヲ得タ。

供試部分	水分 %	灰分 %	エキス分 %	タンニン %
全　草	14.530	6.075	18.770	4.652
葉	14.270	6.483	39.200	20.320
莖	16.710	6.037	25.060	3.760
根	15.980	9.137	25.800	4.560

尙**タンニン** Tannin ノ定量ハ International Association of Leather Trades' Chemists ノ協定法ニ從ッタ。

げんのしょうこノ收斂性ハ**タンニン**質ニ因ルモノト認メラレルガ分析ノ結果全草中葉ニ最モ**タンニン**質多キコトガ知ラレル。

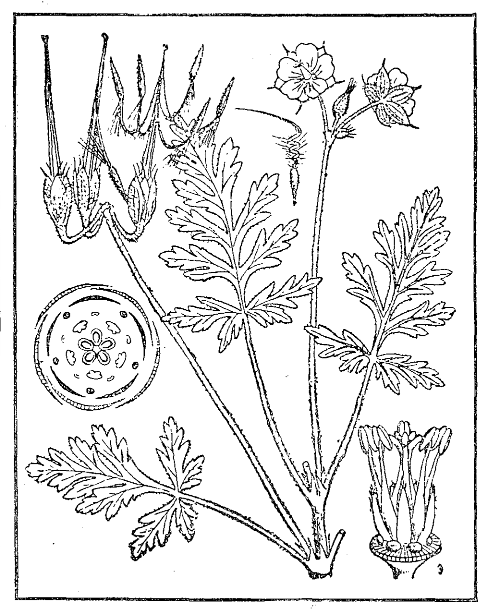


Fig. 5. *Erodium Stephanianum* WILLD.
きくばふうろ
劉愼愕：Systematic Botany of the Flowing Families in north China (1931) ニ依ル

尙文獻ニ徵スレバ沒食子酸、琥珀酸、**クェルセチン** Quercetin 及其配糖體ヲ含有シ、無機成分中ニハ稍々多量ノ**カルチウム**鹽ヲ含有シデヰル。

最後ニ從來げんのしょうこノ漢名ニ屢々牻牛兒苗又ハ牛扁ガ充テラレルガ是ハ共ニ妥當デハナイ、牧野博士(本草 7 號、昭和 8 年)ニ依レバ牻牛兒苗一名鬪牛兒苗ハ *Erodium Stephanianum* WILLD. (ふうろさう科)デ滿洲デハ太陽花、朝鮮デハ山牛兒苗ト稱シ又きくばふうろ一名せりばふうろノ和名モアルガ本邦

內地ニハ產セズ、支那、滿洲、朝鮮、東部**シベリア**ニ分布スル多年生草本デ (Fig. 5.) 又牛扁ハれいじんさう *Aconitum pallidum* REICHB. f. *genuinum* NAKAI (きつねのぼたん科) ニ充テラレテヰルガ未ダ判然シナイモノデアルト謂フ。因ニ現今我邦市場デ**牛扁草**ト稱スルモノハ何レモ殆ンドげんのしょうこデ牛扁草ハげんのしょうこノ別名トシテ廣ク行ハレテヰル。

本稿ヲ草スルニ當リ分析ヲ擔當サレタ星森雄君ニ深謝スル。

日本地衣學史 (其二)

佐藤正己

M. M. SATÔ: History of Lichenology in Japan (II)

安田時代

三好時代ニ續イタ日本地衣學ノ暗黑時代ヲ打開キ、日本ノ地衣學界ニ新知見ヲ齎シタノハ故理學士安田篤氏デアル。氏ハ明治元年九月八日東京下谷練塀町ニ呱々ノ聲ヲアゲ、長ジテ東京帝國大學理科大學ニ入リ、植物學ヲ修メ明治二十八年七月ニ卒業サレタ。[1] 氏ノ卒業論文ハ「胡蘆科植物ノ比較解剖」ト云フ題目デアツタガ、卒業後ハ下等植物ノ生理學的研究ニ進マレ、殊ニ菌類ニ興味ヲ持チ、次第ニ此等ノ分類學的研究ニ沒頭サレ、ヤガテ地衣類ノ分類ニモ步ヲ進メラレタノデアル。

安田氏ガ地衣類ノ研究ヲ始メラレタノハ、第二高等學校教授トシテ仙臺ニ赴任サレタ後ダガ、同地ノ篤學者飯柴永吉氏ハ專門ノ蘚苔ノ外ニ地衣類ニモ着目シ、歐米地衣學者ノ鑑定ヲ受ケタ多數ノ標本ヲ所藏シテ居ラレタノデ、此等ヲスベテ安田氏ニ提供シテソノ研究ヲ助ケラレタ由デ、此事ハ研究ノ第一步ニ入ツタバカリノ安田氏ノ貴重ナ道しるべニナツ事ト思フ。[2]

安田氏ハ自ラ北ハ樺太•千島ヨリ•南ハ四國•九州マデモ採集ニ旅行シ、多數ノ標本ヲ採集サレタガ、ソノ他ニ宇井縫藏•千野喜十郎•中路正義•生駒義博、角田愛花等ノ諸氏ガ夫々ソノ在住地附近デ採集シテ安田氏ニ送ツタ標本モ相當ノ數ニ及ンデヰル。

(1) 市村塘: 故理學士安田篤氏履歴及業蹟 [植物學雜誌 XXXVIII, 249-250 (1924)]
(2) 飯柴永吉: 本邦地衣類研究小史 [植物趣味 II, 2, 62-65 (1933)]